

吉本隆明の初期思想

——東京府化学工業学校から米沢高等工業学校まで——

I 最初の詩——東京府立化学工業学校時代 1

一九四一年（昭和一六）四月、吉本隆明は一六歳、東京府立化学工業学校（現東京都立化学工業高等学校）の最高学年に進級した。この年の五月、同校応用化学科の同期生、川端要壽、深沢斌思朗、本間賢一、吉本邦芳、中山鑄七らとともに、ガリ版刷りの化学工業学校和楽路会文芸部編『和楽路』の創刊に参画した。五月号、七月号、八月号、十月号、十二月号の五冊が残されており、四月創刊号、六月号、九月号の三冊は散逸して現在のところ見る事ができない。

これらの諸号に吉本は、いくつかのエッセイと小品そして詩を掲載している。それらの作品のうちには、吉本の思想の出発点を示唆するものがすでに現れている。

「哲」の唄」は『和楽路』五月号に掲載された。（『吉本隆明全詩集』——以下『全詩集』——六五八頁、二〇〇三年、思潮社）

人はみんな私を「哲」と言った

「哲」は泣く事が大好きだった——

葦の新芽のみず／＼しい

海辺でも

「哲」は泣くに違ひない——

「哲」の踏んで行く

砂の足くぼを

真赤な「べんけい蟹」が懐しむに違ひない

「哲」は今日も

白々と続く砂浜に佇んでゐる

「哲」の好きな船は

今日もやつて来ない

「哲」は明日もその船を待つてゐるだらう

「哲」の待つてゐる船は

未だ難破するものか

「哲」の待つてゐる船は

難破するものか

「哲」は今日も

白々と続く砂浜に佇んでゐる

川端要壽が指摘するように、⁽²⁾活字になったものとしては最初の詩作品である。当時級友たちから「哲ちゃん」と呼ばれていた自

渡辺和靖
愛知教育大学教授

分自身を歌ったものである。「哲」は哲学の哲であり、何事にも哲学的な思索を巡らすことを好んだ吉本の性格に由来する渾名である。この点について、川端要壽は別の文章で以下のように述べている。

この愛称は哲学の哲からきたもので、彼が哲学書を読んでいるのを誰かが見たものであろう。少年期を脱しきれない私たちに、哲学は雲上の学問であり、それを勉強している吉本は確かに畏敬の存在であった。『墮ちよ！さらば』二七頁、一九八一年六月、檸檬社)

作品のうちには、そんな「哲」があなたの沖から出現するはずの「船」を待ちわびている姿が歌われている。前半部分は過去形で、後半は現在形、そして未来形で書かれている。

『和楽路』の同じ号に掲載された「随想(其の一)」には、小さな造船所を経営していた父に連れられて、小さな蒸気船を「台場」まで走らせ、東京湾を眺めながら真つ赤なグミの実を食べた少年時代の思い出が記述されている。

雨の日でも、時には晴れた日でも、台場の青草を踏みしだいて、遙かの国から流れてくる海風と共に「ぐみ」の実を懐むで見るのである。時には番人に見つかつて、ポケット一杯に詰込んだ「ぐみ」の実を抱込んで舟へ逃込む事もあつた。舟が岸を離れてからテントを引被つて、お祖父さんにも一つかみ与へてはゆつくり食べ合つたものだった。(『吉本隆明全著作集』——以下『全著作集』——第一五巻、七頁、一九七四年五月、勁草書房)

「哲」の唄」において、彼方からやってくるはずの船を待ちながら「哲」のたたずむ海岸は、おそらく「随想(其の一)」に描かれた「台場」付近の東京湾であろう。そして「真赤な「べんけい蟹」は、おそらく真つ赤な「ぐみ」の実」と等価であり、そこには楽しかった少年時代の思い出が重ね合わせられている。⁽³⁾

府立化学工業学校の最高学年に進み卒業を一年後に控えた吉本は、幸福な少年時代が終わりを告げることを意識しつつ、未来へをみつめている。自分をどこか未知の世界へと連れていってくれる「その船」は今日も来ない、というフレーズのうちには、未来への漠然とした不安が表現を与えられている。

「哲」という言葉の繰り返しのうちにリズムカルなものを感じるが、思うところをそのまま書き記したように自由律であり、とくに技巧的なところは見られない。この作品の注目すべき特徴はそうしたスタイルや表現のうちにはない。

詩を書き始める年少者は往々にして、美しい風景とか恋の体験など、自らに親しい対象やイメージをまず写し取るうとするものである。しかし吉本は、このおそらく制作した最初の詩篇において、外側の対象やなにかのイメージを描写しようとするよりも、おのれの胸のうちにわだかまる、ある定かならぬ思いに、言葉によつて形を与えようと模索している。「難破船」はおのれの不確かな未来のメタファである。その最初の詩において吉本は詩人としての決定的な資質を示したといえるだろう。

その意味でこの詩は、同じ頃に制作された三島由紀夫の「十五歳詩集」に収められた「凶ごと」と題する作品とよく似ているといえる。(『三島由紀夫全集』第三五巻、五〇五〜六頁、新潮社)

わたくしは夕な夕な

窓に立ち椿事を待った、

凶変のだう悪な砂塵が

夜の虹のやうに町並の

むかうからおしよせてくるのを。

枯木かれ木の

海綿めいた

乾きの間には
薔薇輝石色に
夕空がうかんできた……

濃沃度丁幾を混ぜたる、
夕焼の凶ごとの色みれば
わが胸は支那繻子の扇を閉ざし
空は黒奴たちあらはれきて
夜もすがら争ひ合ひ
星の血を滴らしつゝ
夜の奔きで閨にひびいた。

わたしは凶ごとを待っている
吉報は凶報だった
けふも轢死人の額は黒く
わが血はどす赤く凍結した……。

ここで少年は、昼と夜のあわいの微妙な光の中で窓際に立ちながら、どこかむこうの方から押し寄せてくるはずの変事を待っている。こうした表現のうちに、暖かく庇護された少年時代が終わる予感と未来への不安が表現されている。三島の待つ椿事は、吉本の待つ難破船と等価である。

幼くして日本の古典を学び既に数十篇もの詩作品をものしていた少年と、詩作を始めたばかりの少年という、二人の経歴の差異に由来する措辞や技巧における精粗の違いは見られるものの、なにかの外的な対象を写し取るというのではなく、心の中にわだかまる定かならぬ思いに形を与えようとする手つきにおいて、二つの作品が共通していることは疑いあるまい。ここに、その後二人が辿った対照的な思想の軌跡を超えて、共通の資質が秘め隠され

ていたことが知られる。⁽⁵⁾
『和楽路』の同じ号に掲載された「随想（其の二）」で、吉本は、『論語』に由来すると思われる「小人⁽⁶⁾」という言葉に関わって、自らの「人生観」について語っている。

全く私の人生観は特異（偏奇）であるかも知れぬ。が併し私はその人生観を他人に誣ひた事は只の一度もない。私は私と全く正反対の人生観の持主であつても、尚その人格を尊敬してゐる人がある。人は私自身が「俺は小人ではない」と自惚れても許して呉れるだらう。（『全著作集』第一五巻、七〇八頁）
独善的に一つの考え方を押しつけるような風潮に対する批判的なコメントである。吉本が思想の内容そのものよりも、それぞれが互いの思想を尊重するという、思想の在り方にまず関心を示したことは注目すべきことである。このことも、さきの「哲」の唄」とあわせて、吉本の資質と思想の傾向を示す大きな特徴のひとつとして指摘することができる。

この時期の吉本が『論語』の思想に大きな影響を受けていたことは、『和楽路』一九四一年一〇月号に掲載された「孔丘と老聃」という文章からも知ることが出来る。そのなかで吉本は、『論語』から採った孔子のエピソードを物語風に叙述しながら、「世界の三聖」釈迦、孔子、キリストのなかで、

私は誰が一番好きかと言へば論なく孔子を第一とする。決して用ひられそうもない大経綸をふところに、狗のやうに諸国を廻つた孔子こそは、私達が最も近づき易い感じがするのである。（『全著作集』第一五巻、一五頁）
と述べ、最後に高村光太郎の「老聃、道を行く」という詩を引いて、老子の思想にも興味を示しつつ、孔子と老子の思想は結局、共通のものではなかったかと結論している。

吉本のこの時期の思想がつねに国家の問題と密着しているのは、個人のささやかな幸福を優先させる長沮や桀溺の思想に対す

る、

「わしは鳥獸と一緒に暮すことは出来ないよ。わしには天下の百姓（ヒヤクセイ）より外には共に生を樂しむべき者は無いのだ。道が行はれてゐる世であつたら、わしのやうなものゝが仁の道を説いて廻る必要があるものか。道が行はれてゐないからこそ、こうして困んで行くのではないか」（同、一四頁）という孔子の愚直なまでの「大経綸」を展開した『論語』の思想の倫理性に心惹かれるものがあつたのではないかと推測される。しかし同時に、吉本は、孔子は老子を通して「政治と言ふものが、民の中にあるのを知つてゐた。孔子は終に政治は一人の人民を救ふ事に遙かに及ばないのを悟つたのである」（同、一五頁）と語るように、個人の価値を尊重する老子の思想にも同感してゐたのである。

そして、こうした府立化工時代における孔子や老子の倫理性に対する共感が、やがて、宮澤賢治への尊崇の感情へと変化していったことは、吉本が一九四二年の末に、花巻へ賢治の詩碑を訪ねたあとに制作した詩の一節に「アナタノ思想ハ／老子ノ若イ頃ノヤウナノ年老イタふらんす人ノヤウナノ思想ダ」（『全著作集』第一五卷、二二二頁）とあることから窺うことができる。

同じ『和楽路』五月号所載の「随想（其の三）」では、「私の周囲」に「多くの尊敬すべき「友」が居る」ことを「幸福」に思うと書き、その友たちが将来「必ず世に出て大成するであらう」と予言し、自分もまたひそかに「成功」を期していると語つてゐる。そしてつねづね「一つの歌」を心に用意していると述べ、文末で石川啄木の、

友が皆我より偉く見ゆる日よ

花を買ひ来て妻と親しむ

という作品を引用している。（『全著作集』第一五卷、八頁）この文章からは、同級生に対する吉本の微妙な感情の揺れを感じることができるとともに、この時期、吉本が啄木を愛読していたことがここから知られる。

川端要壽はこの「随想（其の三）」に関して、「吉本は少年時代より、彼が将来何になるかは解らないまでも、立身出世という夢に取りつかれていただけは解る」と少し意地悪な指摘をしている。（前掲論文、一〇六頁）しかし、この文章の文脈からすれば、それは、他の友だちに対する敬愛の念を表現しようとしたものと理解するのが妥当だろう。

吉本自身、のちに心理学者馬場礼子との対談において、自らの少年時代について、

おそらくはその自己愛の世界、あるいは自己昇華か知りませんけど、そういうものの世界と、つまり具体的現実的に向上心に溢れななとかという、まったくこれ優等生みたいな、そういうので押し切ることとは、ぼくのなかで同一視されていて、それで自分のなかにそういうふうには押し切れない、なんかよけいなものがあつて、それが絶えずぎゅうぎゅう、無意識のうちに、あるいは意識的に引き戻していったんじゃないか。と語つてゐる。（ぼくが真実を口にする）『ユリイカ』一九七四年四月、一〇〇頁）吉本のうちにも少年にふさわしい功名心が潜在していたということであろうか。

II 下町の時間の流れ——東京府立化学工業学校時代II

一九四一年一二月、日米開戦とともに、吉本は府立化学工業学校を繰上卒業になる。一九四一年一月発行の卒業を記念する『和楽路』最終号に、吉本は「くものいと」「うら盆」「冬」の三篇の詩を掲載している。いずれも、抒情小曲風の小品である。ここ

では「うら盆」と「冬」を引く。

まず「うら盆」について見る。〔『全詩集』六五九〜六〇頁〕

うら盆で

灯籠流せ

灯籠流せ

舟の下で

溺れた子が

抱いて帰る

ここには隅田川の流れとともに生きている、吉本の生家のある東京下町の雰囲気が映されている。この作品のもつムードのうちには、人の生き死にが川の流れのように自然の一つのサイクルとして受け入れられていた世界が反映している。

のちに吉本は、日本語の詩のリズムについて論じるなかで、この作品に触れている。吉本はまず、自らが詩を作り始めた頃について次のように述べる。

僕が幼稚な童謡まがいの詩を最初に書き始めたときには、ひとりでに無意識には言えなくて、韻律から入っていったように思います。その頃に読んでいたのは藤村の『若菜集』なんかで、七五調でいけば調子よく言葉が出てくるというのが好きでした。結局、韻律としては七五調に近い状態で言葉を表示していくと、それらしき詩ができてしまう。何が主題になるかは、その時に感銘深く残っていることが何かによるわけです。（『吉本隆明 戦後五〇年を語る』『週間読書人』二〇〇〇年一月七日号）

この回想からすると、この時期、吉本は、誰の影響ということもなく、少年時代から読み覚えた日本の近代詩の七五調のリズムで韻文を綴り始めたということのようである。

しかし、さきの「哲」の唄」にしてもこの「うら盆」にしても、そのリズムは、藤村の『若菜集』に見るような、明治新体詩の単調な七五調のスタイルとは決定的に異なっている。藤村などの新体詩のリズムに影響を受けたという発言は、残されてはいないがおそらく「哲」の唄」以前に制作された吉本のもつと前の詩作品について語られたものと推測される。

また「うら盆」のリズムは自然発生的なリズムといったようなものでもない。

吉本の回想は先の引用に続いて「うら盆」について具体的に言及している。

どうしてそんな詩ができたかというと、隅田川の方から出て、堀割のすぐ前のところで、そんなに頻繁ではないんですが、水遊びをしている子どもが溺れてしまったことが時々あって、それがとても印象に残っていたんです。（中略）

そういうことが自分に印象深くあって、それと溺れた子供と、灯籠流しがつながっていった。うちの前あたりではそんなにしなかつたのですが、わりと裕福な家では、お盆のときに、蠟燭に火を付けて、戒名を書いたものとか果物とかを入れた船を流したんです。（同）

あきらかにここには、盂蘭盆という地域に根ざした伝統行事にかかわる、ゆつたりとした時間の流れを意識したリズムが提示されているのである。その意味で「うら盆」という作品が自覚的技巧的に制作されたものであることは疑いない。

つぎに「冬」という作品。〔『全詩集』六六〇頁〕

たれが

おまへに

来いと 言ふた

おとよ が 死んで
しげる が 生れ

木の実が からから

季節は流れ、人が生まれ、人が死ぬ——そうした自然のなかで営まれる東京下町の日常生活が描かれている。「木の実が からから」という叙景のうちには、悲しみに似た無常観が込められているように見える。「おとよ」や「しげる」という固有名は具体的な誰かを意味するという以上に、地域住民全体のなまなましい提喻として機能している。

この作品のリズムも自然発生的なものではない。木枯らしの吹く東京の下町を流れる時間を表現するために吉本は、このような一見素朴なわらべうた風のリズムが採用されたのである。

吉本の詩がしだいに技巧的な洗練を加えていることは明らかである。同時に、そうした吉本の意識の基底に、こうした東京下町に生きる庶民の生活と自然に対する諦めに似た無常観が息づいていたことは興味深い。

ちなみに、吉本は米沢高等工業学校時代に『呼子と北風』と題する詩集原稿を残しているが、その冒頭に配列された「北風」という作品は、この「冬」という作品とはるかに結びついているように見える。⁽⁸⁾ 『全詩集』六六四頁

渦状星雲の極北を吹いて

人の愛の蔭にとまつた

いまだ死なぬときに

はんの木の葉 散れ

帽にさす夕日

影はろばろ

まず、短い行で短い連という作品の構成スタイルがよく似ている。つぎに、木の葉あるいは木の実が散るとイメージが共通している。さらに最後の行が「からから」「はろばろ」とオノマトペによつて結ばれているところも共通している。語彙や措辞の点で大きな変化が見られるが、両者の間にはあきらかに関連性がある。おそらく吉本は、米沢に行つてから、東京時代に制作した詩作品をふり返りながら、それに添削を加えるなどの作業をしていたものと思われる。それが「北風」という作品に結晶し、詩集稿『呼子と北風』に収められたものと思われる。

III 米沢高等工業学校時代

吉本は、一九四一年一二月に東京府立化学工業学校を繰上卒業したのち、翌年三月、東京会場での受験を経て、四月、米沢高等工業学校応用化学科に入学する。現在の山形大学工学部の前身である。吉本自身『吉本隆明全著作集』第一五巻所収の自作解説「過去についての自註」において、

この土地では、書物が間接の師であつた。何度かかきとめたように、ここでも詩人高村光太郎、宮沢賢治、作家横光利一、太宰治、批評家小林秀雄、保田与重郎の名を書きとめておこう。これらは、あきらかに、雑誌のあいだからわたしに、影響を印したといえる文学者の名である。高村光太郎は『智恵子抄』や改訂版『道程』によつて、宮沢賢治は『名作選』や草野心平編の『研究』によつて、横光利一は長編『旅愁』（途中）までの諸作品によつて、小林秀雄は『無常といふこと』までの諸作品によつて、保田与重郎は、できうるかぎりの批

評作品によつて、太宰治は『富嶽百景』や『佳日』や『お伽草子』によつて。〔全著作集〕第一五巻、四五九頁）

と書いている。東北米沢の地に来て、それまでの、今氏塾における乱読の時代から、一定の方向性を持った読書へと変化したことが語られている。

吉本は、米沢高等工業学校入学の翌年、一九四三年の冬から四年の春にかけて、同期生の郷右近厚、田中寛二らと回覧誌『からす』を刊行している。回覧雑誌とは、仲間同士が手書きの原稿を持ち寄って一冊に綴じ合わせ、互いに回覧して読み合ひまた批評し合う雑誌のことである。たとえば小林多喜二は小樽高等商業学校時代の一九二一年、自らの作品を書いたわら半紙を綴じた『生れ出ずる子ら』と題する個人回覧雑誌を制作し、友人たちに見せて批評を仰いでいる。

『全詩集』『解題』に『からす』について以下のような説明がある。

「からす」は、当時市販の粗末な更半紙の四百字詰原稿用紙一種類に統一した合計六十二枚の生原稿を、別な白い厚紙二枚をもつて表紙とし、表紙の上から金属の止め金で二ヶ所とじて製本したもの。表紙の内側はピンク色で、白い表紙に墨で「からす 第一号」と書かれている。〔全詩集』『解題』一七

七九頁）

東京府立化学工業学校における『和楽路』の場合がそうであったように、ここでも吉本は中心的な役割を果たしたものと思われる。それは吉本が「巻頭言」を執筆していることから知られる。その「巻頭言」で吉本は、文章を書くことの意義について以下のように述べている。

唯自分の考へてゐる処を表現しつくして、その時の何とも言へぬ安心から出発してもつと深い自分を見付けて行くのです。（中略）書く時は、その様な安心立命を得るためと、その

安心から出発してもつと深い自分を探し行くためであると思ひます。それだから文章を書いたり、書物を読んだりするだけで、自分の人間をより深いものに導くことが出来ます。〔全著作集〕第一五巻、二二頁）

言葉を書きしるすということは、なにかを指示したり伝達したりするものではなく、おのれ自身を表現することによつて、おのれ自身をより深く探求しようとするものであると吉本は述べる。吉本は自らを「化学者」として規定し、化学者はそのような態度で文章を書くべきであると述べている。もちろんこの時期、吉本は化学者になろうと志していたのだが、これはしかし化学者の態度ではない。むしろ、詩人としての態度であると言ふべきであろう。吉本が化学という領域にすぐれた才能を発揮していたとしても、吉本の才能の本質は、詩人としての資質にあったといふべきであろうか。

このことを無意識のうちに自覚しているかのように、吉本はこれに続いて、

それ故文章を書いたり読んだりすると、現実を遊離してしまふなどと考へてゐる人は問題になりません。又文章を書いたり読んだりしながら現実を遊離してしまひはせぬかと不安に思ふ人は矢張り駄目なのだと思います。

とつけ加えている。（同）

与えられた世界の名づけられたなものかを指示したり伝達したりするのではなく、まだ現実的に形を与えられていないものにイメージを与えたり、まだ名づけられていないものに名前を与えたりすることは、常識的な立場からは「現実を遊離」することであるという評価につながることを吉本は無意識のうちに感じたのであろうと思われる。

問題に決着をつけるように吉本は以下のように述べる。

どんな種類の文章を書いても、自分を自分以上に表はそうと

したり、又何の意味もないことを意味ありげに書いたりさへしなければ、その人が自然に現はれるものです。僕達はその自分を自然に表はすやうな文章を書き得ると言ふことは、他人を理解し、正しく洞察し得ると言ふことです。(同)

自分を自分以上に見せようとする術学趣味や、なにも言うことがないのに意味ありげな空虚な文章を弄することを否定して、吉本は、文章のうちにそれを書いたものの人間性がおのずと現れるものであると結論する。

また「巻頭言」の中で、吉本は、現在当面する課題について次のように言及している。

僕は僕達が現在持つてゐる大きな問題や決心については何も言ひません。それは余りに大きく、そして真剣な問題だからです。もつともつと深く考へて、その時僕達は日本人である僕達を心ゆくまで語り合はうと思ひます。(同)

「大きな問題や決心」とは、明言されてはいないが、『からす』刊行のすぐ前、十二月八日の真珠湾攻撃によつて開始されたアメリカをはじめとする連合国との全面戦争を意識した発言であることは明らかである。論ずる内容については特に注文は付けないが、何を論ずるにしても「日本人である僕達」について深く突き詰めていかなければならないと吉本は言うのである。

第二次世界大戦を戦いつつある日本の運命という問題を充分に認識し、それに応じる決意を胸に秘めながらも、おのれ自身の心の姿勢を第一に考えることが必要であるというのがこの時期の吉本の基本的な立場であつたことが知られる。

同じ『からす』第一号に吉本は「無方針」と題する断章集を掲載している。その中の「利己主義」という断章。

「彼奴は利己主義だ」などと他人を非難する声があつたとする。この場合本当の利己主義は非難する側にあることを私は、殆ど請合つてもよい。よくそんな非難をするくせのある人は、

勤勞奉仕をする前に、坐禪でも組むべきだと私は思つてゐる。

(同、二四頁)

他人を「利己主義」と批判するものがかえつて利己主義者であるというこの議論は、当時の集団主義的な雰囲気に対する吉本の屈折した批判であることは確實である。そうした風潮に対して吉本は、もつと自己を見つめなさいと勧告している。

また、「白い花」という別の断章では次のように述べている。私が若し誰かから一枝の白い花を贈られたとするのだ。私はその花をどうするだらうかと考へて見た。幸に私は何処かに緑色の花瓶を持つてゐる筈である。私はそれに挿して、貧しい机の上のあちらこちらに移動して、白い花を楽しむことが出来るだらう。けれど私の本当にしたいことは、その花を天井から吊して空中に浮べて眺めることなのだ。そしてそれ以上にしてみたいことは、しんしんとした蒼い空の無方にその花を浮べて眺めることなのだ。きつと、無上に美しいに違ひない。或日私は意識の超絶を随分恐れることがある。この言葉は覚えておいて呉れるとよい。(同、二四頁)

ここにはおそらく『文学界』一九四二年四月号に発表された「当麻」において小林秀雄が展開した議論が反響していると思われる。小林は、そのなかで、世阿弥を取り上げて以下のように論じている。

僕は、無要な諸観念の跳梁しないさういふ時代に、世阿弥が美といふものをどういふ風に考へたかを思ひ、其処に何んの疑はしいものがない事を確かめた。「物数を極めて、工夫を尽して後、花の失せぬところを知るべし」。美しい「花」がある、「花」の美しさといふ様なものはない。彼の「花」の観念の曖昧さに就いて頭を悩ます現代の美学者の方が、化かされてゐるに過ぎない。(『小林秀雄全集』第八巻、一五〇六頁、新潮社、一九六七年)

吉本の文章の中に見える「私は意識の超絶を随分恐れることがある」という部分には、「彼の「花」の観念の曖昧さに就いて頭を悩ます現代の美学者の方が、化かされてゐるに過ぎない」という小林の思索の反影を認めることができる。

のちに吉本は、戦時中の読書について、

僕らも戦争中に、自分なりにその当時の日本文学の作品を読んだり、批評を読んだりしてました。どういう人たちかという、批評家でいえば小林秀雄や、ちよつと違うけれど同じように尊重しながら読んでいたのは、日本浪漫派系統の理論家、特に保田與重郎ですね。この二人が、僕ら学生の読者の立場から見ると、圧倒的に優れた批評家に見えたわけですよ。と前置きしたうえで、とくに小林秀雄について、

この人が古典主義的になっていったのは戦争末期ですが、この時期の作品に、源実朝や西行を論じた『無常といふ事』という古典論があります。この中にも「小林秀雄じゃないと書けないよ」というものが残っています。(中略)小林秀雄の西行論はわずか四〇〇五〇枚のものですけれど、西行のイメージの鮮明さとモダンさはちよつと国文学の西行研究者には及びもつかないものを持っていました。

と続けている。(吉本隆明 戦後五〇年を語る『週間読書人』一九九五年一〇月二〇日)小林秀雄がこの時期に展開していた古典論について吉本が注目していたことが知られる。

この時期、小林秀雄は、さきに引いた「當麻」に始まる、のちに評論集『無常といふ事』(一九四六年二月、創元社)に集録されることになる『文学界』に断続的に掲載した一連の論稿において、日本の古典文学を取り上げて、観念や概念の空しさについて論じている。たとえば一九四二年六月号に掲載された「無常といふ事」に、

歴史の新しい見方とか新しい解釈とかいふ思想からはつきりと逃れるのが、以前には大変難しく思へたものだ。さういふ

思想は、一見魅力ある様々な手管めいたものを備へて、僕を襲つたから。一方歴史といふものは、見れば見るほど動かし難い形と映つて来るばかりであつた。新しい解釈なぞでびくともするものではない。そんなものにしてやられる様な脆弱なものではない。さういふ事をいよいよ合点して、歴史はいよいよ美しく感じられた。(『小林秀雄全集』第八巻、一八頁)

とあり、また七月号に掲載された「平家物語」に、

平家のあの冒頭の今様風の哀調が、多くの人々を誤らせた。平家の作者の思想なり人生観なりが、其処にあると信じ込んだが為である。(中略)作者を、本当に動かし導いたものは、彼のよく知つてゐた当時の思想といふ様なものではなく、彼自らはつきり知らなかつた叙事詩人の伝統的な魂であつた。

(中略)平家の哀調、惑はしい言葉だ。このシンフォニーは短調で書かれてゐると言つた方がいゝのである。一種の哀調は、この作の叙事詩としての驚くべき純粹さから来るのであつて、仏教思想といふ様なものから来るのではない。(同、二二―三頁)

とあり、また八月号に掲載された「徒然草」に、
彼には常に物が見えてゐる、人間が見えてゐる、見え過ぎてゐる、どんな思想も意見も彼を動かすに足りぬ。評家は、彼の尚古趣味を云々するが、彼には趣味といふ様なものは全くない。古い美しい形をしつかり見て、それを書いただけだ。

(同、二五―六頁)

とあり、さらに一一月号と一二月号に分載された「西行」に、
西行は何故出家したか、幸ひその原因については、大いに研究の余地があるらしく、西行研究家達は多忙なのであるが、僕には、興味のない事だ。(中略)出家とか厭世とかいふ曖昧な概念に惑はされなければ、一切がはつきりしてゐるのである。(同、二八―九頁)

とあるように、小林はいっかんして、観念や概念に囚われることなく、直に古典の世界に接近することを説いていた。そのような小林の議論が吉本のうえにに影を落としているように見える。

しかし、小林がこの時期の論稿を、戦後すぐの一九四六年二月に『無常といふ事』という評論集として公刊していることが示すように、敗戦という現実によって少しも自らの立場に揺らぎをみせることはなかった。つまり小林は、敗戦以前におのれの思想的立場を形成し終えていたのである。これに対して吉本は、府立化学工業学校を繰り上げ卒業し、さらに米沢高等工業学校をも繰り上げ卒業することになることが示すように、戦争そして敗戦という現実によって大きく振り回されることになる。まだ思想形成期にあった吉本は、その思想的な基軸を確立する前に、不安を抱えたまま、未来への船出を余儀なくされたのである。と同時に、そうした吉本の置かれた状況は、逆に吉本の思想のうちに、時代の刻印を深く刻みこむ結果ともなったのである。

註

- (1) 残された五月号が創刊号であるという可能性も排除できない。
- (2) 「府立化工時代の吉本隆明」『現代詩手帖』一九七二年八月、一〇五頁。
- (3) 磯田光一は『吉本隆明論』において、吉本のこの文章を引き、芥川龍之介の詩などを引いて「下層庶民の生活意識が網の目のようにまつわりついている」「楽園」について指摘している。(一九七一年、審美社、一六〇七頁)
- (4) のち吉本は『言語にとつて美とはなにか』(一九六五年、勁草書房)において、言葉の機能について「指示表出」と「自己表出」の二つを区別したが、そうした発想の端緒がここに示されていると言ってもいいだろう。
- (5) 三島由紀夫との比較については白川正芳が「吉本隆明と三島由紀夫 その戦後文学における位置と意味への一考察」で両者の戦争体験の類似につい

て指摘している。「吉本にとつても、三島にとつても、敗戦を境いとして年少時からの意識の深い断絶があり、前者は、世界と激突する幻想のなかに後者は戦後社会を否定すべき対象と感ずることのなかにその回復と継続を願っている。／＼この点が、「近代文学」など第一次戦後派の人たちとの根本的なちがいである。第一次戦後派の人々にはごく一部の人の転向体験をのぞいてはこのような意識の断絶感は見られない。」(『現代詩手帖』一九七二年八月、八三頁)しかし、それ以前に、吉本と三島の感受性のあり方の共通性を指摘しておきたい。

(6) 『和楽路』一九四一年十月号に掲載された小文「孔丘と老聃」にも『論語』が扱われている。この時期、吉本にとつて『論語』は愛読書の一つであったようである。

(7) これは後に制作された詩集稿『呼子と北風』の題名が、啄木の小詩集「呼子と口笛」から発想されたと推測する根拠を提供してくれる。ただし、従来の『呼子と北風』の制作時日や作品配列については大きな疑問があり、過日、日本近代文学館に所蔵された『呼子と北風』の原稿を披見したところ、「呼子と北風」という表題は原稿そのものにはなく原稿を貼り付けた台紙に書き記されており、それが吉本自身の命名によるものなのかどうかは疑わしい。

(8) 詩集名と配列については『全著作集』第二巻の「解題」に「(呼子と北風 昭和十八年下旬)という標題を付して」とありそれに従ったが、既に指摘したように日本近代文学館所蔵の原稿には台紙に「呼子と北風」とあるだけで制作日付についてはなんの記述も見られない。

(9) 磯田光一はこの時期に「父親殺し」すなわち父との激しい葛藤とその否定が行われたと論じている。(前掲書、一八〇二八頁)しかし、吉本が米沢高専へ進学し「化学」を専攻したのは、父親の船大工という仕事を受け継ぐためであった考えられる。吉本が自らを「化学者」と規定しているのを見れば、父親とのあいだに大きな葛藤があったという指摘には疑問が残る。

〔付記〕小林秀雄の吉本に対する影響の詳細については別稿の準備がある。